

2012年9月11日(火曜日)

Het Parool 紙、PS Kind

(注:PS Kind は、子供や教育をテーマとした記事がまとめられている週刊冊子です。毎週一回、火曜日に発行。)

見出し:“心で学ばなければならない”

写真:スザンヌ・ブランカード(Suzanne Blanchard)

写真左:教育に携わる多くの人にとって偉大なモデルとされている日本の教育者、金森俊朗先生が先週アムステルフェーンにお見えになりました。

写真下:著名な日本の教育者、金森俊朗先生が先週金曜日、アムステルフェーン・カレッジにて授業を行いました。

記事全文:

HAVO コースの3年生、カリエン・スヌーイスさんは、数人の友人と一緒に金森先生の授業を受け、こう話してくれました。「金森先生のそばでは、まるで何でも話せるような気がしました。先生は、とてもオープンで、自らのことも話してくれました。普通の授業ではそんなことはありません。普通は、私はばかみたいなリアクションを受けるのが怖くて、自分の気持ちなんかは言えないことが多いんです。」金森先生は、自らの教授法を教育関係者に伝えるため、過密スケジュールでオランダに滞在しており、今回のアムステルフェーン・カレッジでの講演はその一環でした。

金森先生の教授法は、2003年、一年間の撮影期間の後に作成されたドキュメンタリー「Children Full of Life」によって広く知られるようになりました。金森先生は、いのちの大切さを伝えることを自らの使命だと考えています。また、金森先生は、生徒らに自分の気持ちなどを書いた手紙などを持ち寄せ、学校の外での経験や、それらに関する彼らの感情を表現するように促します。最初は自らの殻にこもりがちだった子供達も、段々と自らを表現できるようになり、徐々にお互いのことを思いやれるようになるのです。このドキュメンタリー映画によって、オランダにも多くの金森ファンができました。

アムステルフェーン・カレッジにおいて、金森先生は、思春期の青年らで満席の2つのクラスに対しての授業を行いました。金森先生は友情、そしてお互いを思いやることの大切さについて語ってくださいました。先生は、まず、漢字の「友」という字は「右」という字と「左」という字が一緒になってきているのだ、という説明から始めました。そして、この「右」という字と「左」という字は、それぞれ右手と左手のかたちから生まれたのだという話をなされたのです。子供達はすっかり先生の話に聞き惚れていました。「手が、一体どんなことをできるのか考えてみてください。」と、金森先生は、生徒たちに続けました。

金森先生が生徒たちに手の可能性について問うている間も、先生の身ぶりや表情は変化し続けています。授業を、身体全体で行っているのです。彼は、黒板に絵をかき、待ち、笑い、そして顔をしかめます。生徒たちが実例をあげて答えました。金森先生は満足したようにうなずきました。「そうですね。

手は、人を慰めたり、音楽を奏でたり、ご飯を食べたり、手を振ったり、本当にいろいろなことができますね。そして、書くことで、手は心にあることを伝えることもできます。」

続いて金森先生は、笑っている赤ちゃんの写真を見せました。赤ちゃんの顔は、喜びに満ち満ちています。なぜ、この赤ちゃんはこんなにも幸せなのでしょう？そして、二枚目の写真を取り出しました。なぜなら、この赤ちゃんは誰かの二本の手で抱きかかえられていて、自らの手もその人に向かって差し出しているからです。

次に、金森先生は生徒たちに、家族や友人の手が彼らにとってどういう意味を持っているか、を聞きました。「しっかり考えてくださいね。何も思い浮かばないということは、あなた達がこれまで一人で大きくなってきたということになってしまいますよ。」

長い黒髪の少女が前に出て、自分の父親の死について話しました。彼女のお父さんが亡くなった時、彼女の手を取り、慰めてくれたのはお母さんの手でした。その後、一人の少年が続きました。金森先生は、話をする二人の肩に手を置いて聞いていました。少年は、金森先生より頭一つ分は背が高かったので、クラス中に笑いが巻き起こりました。

アムステルフェーン・カレッジでの授業が終わると、今度は質疑応答の時間となりました。テオ・ローズ先生は、「逆に、子供達が教師たちにとって何かできることもありますか？」と、尋ねました。しばし考えた後、金森先生は「もちろんそうです。」と答えました。「ひどく雨の降った日には、私は子供達とぬかみで一緒になって遊びます。そうした時の子供達の目の輝きは、教室にいる時とはまったく違ったものであることを私は発見しました。それは、まるで子供達が‘先生、授業中でもこんな輝きを引き出せるかどうかやってみてよ’とでも言っているかのようでした。その時、私は学びました。子供であるとはどういうことであるか、を常に念頭に置いて授業をしなければならない、ということ。子供達が、私の中にいる子供を引き出してくれたのです。」

ローズ先生は、アムステルフェーン・カレッジで経済を含むいくつかの授業を受け持っています。ローズ先生は、子供時代にいじめられた経験があり、彼自身の言葉によれば、クラスに馴染んだことはなかったそうです。彼に関心を寄せてくれる先生に出会ったこともありませんでした。現在、彼は、Checkitin!という機関を立ち上げ、学校における尊厳、率直さ、絆のために(いじめに対して)奮闘しています。

こうして金森先生がローズ先生のいるアムステルフェーン・カレッジに来ているのは、Checkitin!の会計を務め、また母でもある、イングリッド・ヘルスロットさんの功績によるものです。彼女は、日本への旅行中に金森先生をオランダへと招待した張本人だからです。

イングリッドさんは、教育・育児をサポートする機関である NIVOS/HetKind とともに今回の金森先生の講演プログラムを企画し、結果として、今回の 10 日間にわたる金森先生のオランダ縦断ツアーが実現しました。同時に、「いのちの授業」のオランダ語版も発表になりました。この本のサブタイトルは、「一人がハッピーじゃなかったら、誰もハッピーじゃない。」とつけられています。

(注:オランダ語版の本のタイトルは、「Levenslessen van meester Kanamori」となっており、直訳しますと、「金森先生のいのちの授業」となります。)

現在は Nivos のディレクターであり、元は障害児教育の教授としても務めた経験のあるルーク・スティーブンス氏は、この日本人教師の来蘭に興奮を隠せません。アムステルフェーン・カレッジでの講演の後、彼は次のように語ってくれました。「感動させられました。金森先生がなさっていることは、授業

ではありません。人生哲学です。」

スティーブンス氏は、オランダの教育界は金森先生のような方々から多くを学ぶことができる、と考えています。「教育の世界から人間が消え去ってしまっているのです。今の教育の世界は、ただ数字と不安だけになってしまいました。」

子供たちが算数、国語などを学ばなければならないということは、もちろん、金森先生もご存知です。金森先生は、「よい教育者は、掛け算などいのちの授業と組み合わせて、与えられた教科書の内容を教えることができるものなのです」と、言っています。金森先生の生徒たちは、成績もよかったです。それは、生徒たちが教科書の内容を覚えることが大事だと教えられていたからではありません。生徒たち自身が、自らの心で大事さをちゃんと理解したからこそ、成績向上につながったのです。

金森先生が大学で教べんを取り始めて既に5年が経ちます。彼は、大学で教育者を育てているということですが、彼は一体そこでどんなことを教えているのでしょうか？「心も体も世界に向けて開け放て」と、教えているそうです。しかし、どうやってそんなことを教えられるのでしょうか？「私がまずやってみせなければなりませんね。講演の中ではなく、実際に子供達がいる教室でね。ここみたいに。」